

# 『甲府の歴史』

## 1. 『甲府盆地湖水伝説』

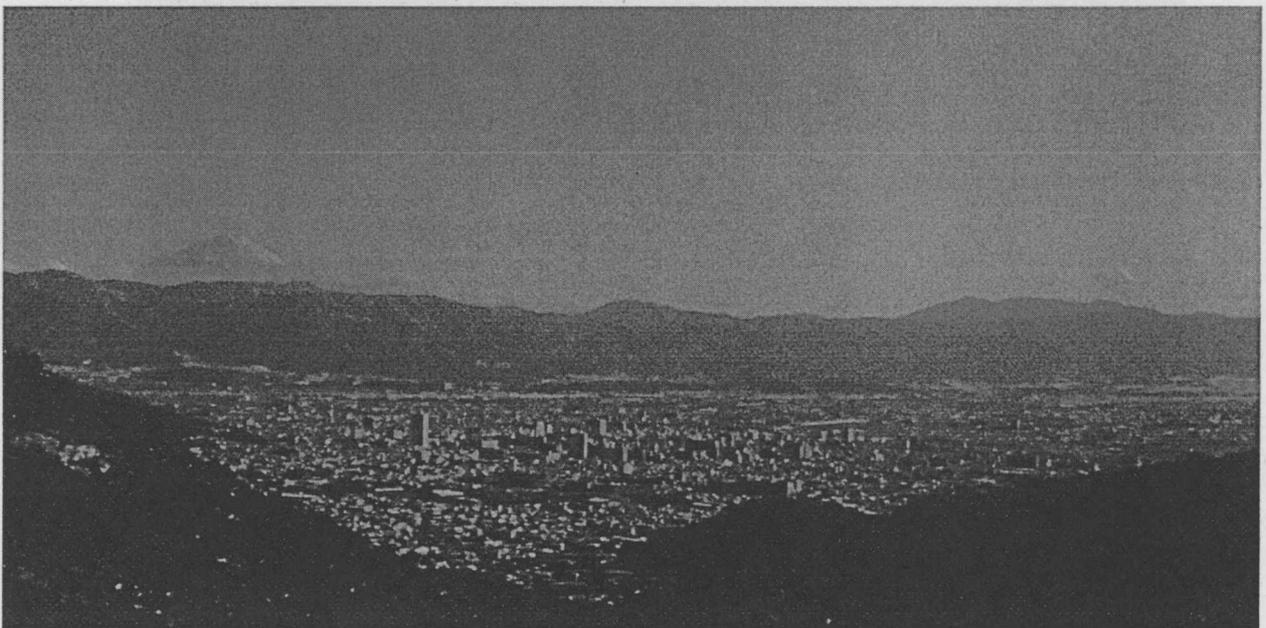
「甲府盆地は、昔、一面の湖水であったという。人々は、周辺の山腹や丘陵上に暮らしていた。この湖を見て二人の神様は、この湖の水を取り除いたら、住むこともできるし良い田んぼができると考えた。二人の神様は力を合わせ、南の岩山を蹴破って湖水を海へ押しやったという。この二人の神様のおかげで、盆地内に良田が広がったというものである。」

①穴切大神社(甲府市)

②佐久神社(甲府市、笛吹市)

③苗敷山(韮崎市)

④国母法城寺(甲府市) 法⇒水が去る 城⇒土が成る 法城⇒豊饒



## 2. 甲府のあけぼの

- ・旧石器時代－立石遺跡（上向山町）県内最古級の遺跡
- ・縄文時代－上野原遺跡（右左口町）、上石田遺跡（上石田三丁目）
- ・弥生時代－上の平遺跡（下向山町）、米倉山B遺跡（下向山町）

## 3. 中道の古墳群と盆地北縁の古墳群

- ①甲斐とヤマトを結ぶ道「中道往還」
- ②小平沢古墳、大丸山塚古墳、銚子塚古墳、天神山古墳
- ③加牟那塚古墳、羽黒天狗山古墳、湯村山古墳群
- ④横根・桜井積石塚古墳群

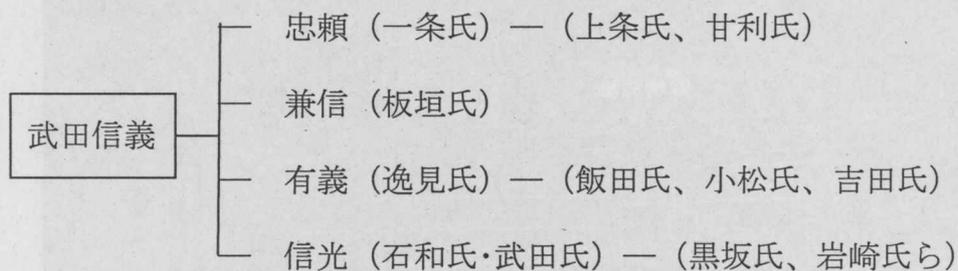


銚子塚古墳(前方後円墳)と丸山塚古墳(円墳)

## 4. 「<sup>な</sup>麻<sup>ま</sup>余<sup>よ</sup>美<sup>み</sup>」の「甲斐」

- ①甲斐の表記 「甲斐」「歌斐」（続日本紀）「柯彼」（日本書紀）
- ②甲斐の語源 「<sup>かい</sup>峽」説…山と山の間、峽中、峽北、峽東、峽南、峽西  
「<sup>かい</sup>交」説…あの世との境界、東国とヤマト王権との境界、  
東山道と東海道の交わる地域
- ③「甲斐国山梨郡<sup>うわと</sup>表門」…大坪遺跡出土の土師器皿のヘラ書文字
- ④「甲斐国巨麻郡青沼郷物部高嶋」  
天寶勝宝4年（752）の東大寺大仏開眼供養の伎楽面の袋の文字。
- ⑤「甲斐国八代郡白井郷」…『倭名類聚抄』

## 5. 甲斐源氏の勃興



### 「名字と地名の話」

#### ①地名から名字が生まれる場合

「武田氏（常陸）」「一条氏」「上条氏」「板垣氏」「栗原氏」

「小笠原氏」「油川氏」「勝沼氏」「柳沢氏」「山宮氏」「大津氏」

#### ②名前等から地名が生まれる場合

「武田（葦崎・武田氏）」「小瀬町（巨瀬氏）」

「土屋敷（土屋昌次）」「天久（武田典厩信繁）」

「道軒屋敷（武田逍遙軒信綱）」「小山田（小山田昌辰）」

「長閑（長坂長閑齋）」

## 6. 「甲府」の成立

### (1) 武田氏館の造営

永正16年(1519)、武田信虎は石和(川田)から、相川扇状地のつつじが崎の地に館を移す。⇒「甲府」の成立

「甲斐府中」の成立 ⇒「甲州府中へ一国大人様ヲ集リ折給候」(勝山記)

※2019年(H31)甲府開府(建都)500年。

### (2) 戦国城下町「甲府」

武田時代の城下町は、館を中心にして南北5本の基幹道路を設定し、館の周囲に武家屋敷、その南に商職人町や寺社を配置し、城下町南端の東西の出入り口には「市」が設けられていた。



国指定史跡武田氏館跡(古絵図・地形などから復元した館跡全体図)

### (3) 新府から「甲府」への再移転

武田氏を滅亡させた織田信長の家臣川尻秀隆は、再び甲斐を治める拠点  
甲府に置いた。以後徳川家康（平岩親吉）、羽柴秀勝、加藤光泰、浅野長政ら  
が甲府城のできるまでの間、旧武田氏館を修築し、甲斐を統治した。

## 7. 近世城下町「甲府」

### (1) 甲府城と城下町

甲府城は、「1の堀」内側を城内とし、家臣の武家屋敷を区画する「2の堀」と  
商職人が居住生活する区画する「3の堀」があり同心円状の構造をしている。(2)

#### 家臣屋敷地

「2の堀」に囲まれた家臣屋敷地は、南北に走る追手小路、橋小路、先手小路、  
土手小路をもとに、長方形の街区が設けられていた。城の近くには、重臣屋敷、  
米蔵、馬場等が配置され、勤番時代には追手と山手の役宅が置かれていた。



甲府城山手渡櫓門

### (3) 町人居住地

町人が居住していた町場は、南北に2箇所あった。北は武田時代の城下町の旧観をある程度活用して再生したもので、南は甲府城の東南部に「3の堀」を巡らせて、新たに作られた町である。

### (4) 寺社の配置

寺は城下町の周囲を取りかこむように配置され、神社は武田氏の館周囲にあった「府中八幡社」「愛宕神社」「牛頭天王社」を城の鬼門鎮護(除け)のために、愛宕山西麓に移している。……「鬼門」とは？

### (5) 柳沢時代の再整備

江戸時代中期の一時期、「甲府藩」が置かれる。柳沢吉保と吉里の2代に渡り甲府藩主として甲斐の国を治める。甲府の町が最も繁栄した時代である。

「棟に棟、門に門を並べ、つくりならべし有様は、是ぞ甲府の花盛り……」

(『兜嶺(甲斐)雑記』)

町名を「古〇〇町」から「元〇〇町」に改称し、伊勢町を山田町に改めた。しかし、吉里は(大和)郡山藩へ国替えされて幕府直轄領となり、甲府は大手と山の手の勤番支配となる。……大和郡山市との姉妹都市

「山流し」……甲府勤番に任命された武士のあだな

### (6) 甲府の町名

上府中(古府中) 26町 元城屋、元連雀、堅、元紺屋、新紺屋、広小路、壘、大工、細工、元三日、広庭、元穴山、横田、元川尻、元柳、愛宕、新青沼、袋、上横沢、下横沢、相川、白木、御崎、八幡、手子、久保

下府中(新府中) 21町 柳、八日、三日、魚、連雀、伊勢、近習(郭内7町)、鍛冶、桶屋、城屋、工、金手、穴山、川尻、片羽、西一条、西青沼、境、上一条、下一条、和田平(後に連雀が上下に分かれ、近習が堅横に分かれて23町になる。)

## 8. 明治時代の甲府

### (1) 甲斐鎮撫府、甲斐府、甲府県、山梨県

明治4年(1871)の廃藩置県によって甲府県から山梨県に。

倒幕に参加した諸藩が核となった県は藩庁所在地が県名となり、  
(鹿児島県、山口県、高知県、佐賀県、広島県、鳥取県、福岡県など)  
佐幕や日和見の藩は県庁所在地の郡名を県名としたという説もある。  
(宮城県(仙台藩)、島根県(松江藩)、石川県(金沢藩)、山梨県(旧甲府藩))

### (2) 藤村紫朗の県政

明治6年から20年まで県令。養蚕の奨励、道路の改修、学校の建設。

藤村式建築。「旧睦沢学校」(藤村記念館)、梁木学校、琢美学校・・・



「府県長官銘々伝」(明治14年)



### (3) 擬洋風建築(藤村式建築)の盛行

明治前期の甲府中心部には、藤村式建築と呼ばれ擬洋風建築の建物がたくさん存在していた。官公署、学校、病院から商店、銀行、一般の住居にいたるまで、数十棟の建物が建ち並び、甲府は全国でもまれに見る洋風建築の集中する町だった。明治10年(1877)甲府を訪れた駐日英国公使アーネスト・サトウは、「この町の西洋建築を模倣した建築物の数は、町の規模からすれば私が知る限り日本一だ。・・・・大きな学校のほか県庁や新しい銀行、裁判所、公会堂、名取式の糸繰工場などもすべてこの様式で作られている。」と日記に記載している。(『日本旅行日記』東洋文庫544)